

読み書き障害児への支援としての DAISY の活用

－通級指導教室の指導と通常学級での指導との連携を通して－

芳倉優富子

(香芝市立下田小学校)

玉村公二彦

(奈良教育大学 学校教育講座 (特別支援教育))

Using the DAISY (Digital Accessible Information System) for Students with Reading and Writing Difficulties

Yufuko YOSHIKURA

(Shimoda Elementary School, NARA)

Kunihiko TAMAMURA

(Nara University of Education, Department of Special Needs Education)

要旨：発達障害等により、読み書きに困難を示す児童（学習障害等）への理解や支援が通級指導教室等で行われるようになってきているが、読み書きに困難を持つ児童が在籍している学級での学習でつまずきを感じ、学習への意欲と自信をなくしていることが多い。通級指導教室での指導と支援を在籍学級での学習に生かし、読み書きに困難を示す児童の学力を保障するという視点でDAISY教科書やDAISY図書を支援ツールとして活用する必要性を述べた。

キーワード：DAISY (Digital Accessible Information System)

LD (Learning Disabilities)

ICT (Information Communication Technology)

通級指導教室 (Resource Room for Students with Developmental Disabilities)

1. 問題と目的

「学習障害」(LD)は、1999年7月、当時の文部省に設置された調査協力者会議により、以下のように定義がなされていた¹⁾。

「学習障害とは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。学習障害は、その原因として、中枢神経系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではない」

21世紀に入り、LD、AD/HD、高機能自閉症などの発達障害への対応も含め特別支援教育施策が進められてきた。1999年当時の「学習障害」の概念の念頭においたものは、AD/HDや高機能自閉症・アスペルガー障害（今日の自閉症スペクトラム障害（ASD））の特徴をも包含するものであり、その後、発達障害への対応として特別支援教育でのアプローチもそれぞれ

の特性にあわせたバリエーションを持ってきている。LDの定義に関しては、現在の文部科学省も1999年当時の定義に基づいて教育施策を行ってきたといえるが、特別支援教育の進展を踏まえて、あらためて「学習障害」として「読み書きに困難を持つ」子どもへのアプローチを実践的に検討する必要がある。

読み書きに困難を持つ児童は、通級指導教室での読み書き困難を克服するための文字指導を受け、少しずつ読みの改善が見られるようになってくる。しかし、読み書き困難を持ちながら在籍学級での学習を積み上げて行くことは、難しい。このような中で、通級指導教室と通常学級での連携を基にして、個別指導と集団指導の連携、また、教材や教育方法上の工夫をおこなうことは非常に重要なことであると考えた。教育方法の工夫として、近年特徴となっているものに、あらたに開発されてきたデジタル機器の活用に注目したい。

DAISYとは、Digital Accessible Information Systemの略で、視覚障害者用のカセット録音図書に代わって、デジタル録音図書を作るために開発された国際標準規格である。デジタル録音図書をさらに発展

させ、音だけでなく、文章と画像を同時に再生できるものがマルチメディアデージー図書である。2008年9月に施行された「障害のある児童及び生徒のための教科用特定図書等の普及の促進に関する法律」、いわゆる教科書バリアフリー法を機に日本リハビリテーション協会がボランティア団体の協力を得て、通常の教科書と同様のテキストと画像を使用し、デジタル化対応させることでテキスト文字に音声シンクロ（同期）させて読むことを可能にしたものがマルチメディアデージー版教科書である。

読み書きに困難を持つ児童の在籍学級での学習や家庭学習での学習支援のための一つのツールとしてDAISY教科書やDAISY図書を使用することで、読みへの負担を軽減することができる。読みへの支援を行うことで、在籍学級での学習や家庭学習に取り組みやすくなる。読み書きに困難を持つ児童が、その困難故に学年を追うごとに学習内容を理解することが難しくなり、多くの児童が学習意欲の低下を示すことが多いが、通級での読み書き指導と共にDAISY教科書やDAISY図書を利用することで困難を軽減することができると考えた。

2. 方法

K市通級指導教室に通級する読み書きに困難を示す児童のうち、読みに困難を示す児童3名の事例について、通級指導教室での読み書き指導と合わせた在籍学級でのDAISY教科書を使った学習指導や家庭でのDAISY教科書やDAISY図書の活用事例を報告し、読み書きに困難を示す児童への効果的な支援のあり方を検討する。

2.1. 対象児について

A児は、幼児期には特に気になることがなく小学校に入学してからひらがなの習得に困難を示し、学校や家庭で行動上の問題も出てきていた為、通級指導教室に繋がってきた。通級指導教室担当（特別支援教育士・臨床発達心理士）がWISC-Ⅲを実施した結果、知的な遅れはみられないものの言語領域の弱さを持っていることが明らかになった。また、小学生の読み書きスクリーニング検査や村井式ひらがな評価（20問）は、やり始めるが、すぐに拒否し検査ができなかった。ひらがな50音の読みでは、20音程度読むことができているが書字になると思い出しができず、書くことができなかった。その後大阪LDセンターでディスレクシアと診断された。

2年生から6年生まで通級指導教室で読み書きの指導を週1回、ひらがなの習得や文章の読み、漢字の習得など読み書きの指導を行った。4年生からDAISY教科書（国語）を家庭、通級指導教室、通常学級で、5年生からは、国語と理科、社会のDAISY教科書を

使用し、当該学年の学習内容の理解を促すようにした。A児は、宿題等の家庭学習時に自分で問題文を読むことができないため、保護者に教科書やプリント等の問題文を読み上げてもらって何とかこなしていたが、内容が難しくなる3年生からは、量の調節や内容の精査が必要になり、担任や保護者との連携が不可欠であった。

B児は、1年生の3学期に教室での学習態度が悪く、通常学級での学習に取り組みないと、通級指導教室に繋がってきた。WISC-Ⅲの結果から知的な遅れはみられず、言語面で弱さがあり、有意義な情報処理が苦手な児童であった。小学生の読み書きスクリーニング検査では、単語読みが逐次読み、拗長音等の特殊音節での読み違いがみられた。書字では清音の習得は、できているものの思い出しが悪く、濁音、撥音、拗音、拗促音、拗長音の書字は、まったくできなかった。医療機関の受診はしていない。2年生から5年生（現在）まで週1回、ひらがなの読み書き、漢字の読み書き、文章の読解等の指導を行った。DAISY教科書は、3年生2学期から国語、5年生から国語と社会を通級指導教室と家庭学習で使い、通常学級での学習がより理解できるように予習と復習に利用した。B児は、通常学級でみんなと同じ教科書で勉強したいという願いを持っていたため、通常学級でのDAISYの利用は行わなかった。家庭学習でDAISYを使い、自分で読めない漢字にふりがなを振ったり、DAISYの読み上げのないものは、保護者に読んでもらったりしていた。B児は、漢字を覚える宿題は、本児に合わせた覚え方をしたため、担任と連携を取り実施した。

C児は、1年生末にひらがなが覚えられない、算数の計算が難しく、学習についていけないと通級指導教室に繋がってきた。通級指導教室での心理検査で、知的発達に遅れはないが注意記憶が有意に低い児童であった。小学生の読み書きスクリーニング検査の読みでは、清音はほとんど習得していたが促音や拗音等の習得はできていなかった。村井式ひらがな評価（20問）では、清音は正解するが思い出しに時間がかかり、よく似た字（は・ほ、い・りなど）の混同もみられた。また、拗音等の特殊音節が入った単語は、書くことができなかった。医療機関の受診はしていない。2年生から通級指導教室での指導を週1回、ひらがなや漢字の読み書き指導を行い、3年生（現在）からは週2回の指導で読み書き指導と算数の学習補充を行った。DAISY教科書の利用は、2年生の通級開始と同時に家庭学習と通級指導教室で始め、3年生からは、単元によって通常学級でも使用した。

2.2. 授業計画の作成

K市通級指導教室では、通級児童の学級担任との連携を大切にしている。通級児童の担任とは、5月に「通

級児童在籍学級担任説明会」夏休みに「在籍学級担任個別懇談」をどの児童の担任とも実施している。

夏休みの個別懇談では、通級指導教室での指導計画を示し、在籍学級での個別の指導計画の相談を行っている。通級指導教室での1年間の指導計画と在籍学級での長期目標や短期目標を関連づけることで、通級指導教室での学習の成果を在籍学級において発揮し、その成果を担任や家庭で認めてもらうことで少しずつ自信を回復できると考える。そのためにも担任、保護者、通級担当が共通理解を持って児童に対応することを大切にしてきた。宿題の量の調節や内容の精選や変更などを日々行うのは、学級担任であり、それぞれの児童のニーズや状態に合わせて調節することは、学級担任との連携の中で適切に実施できるものである。

DAISY教科書の使用に関しても担任との連携が不可欠である。音読の宿題をDAISY教科書で行う、テスト範囲をDAISY教科書で学習してくる、教室での学習にDAISY教科書を使うなどは、学級担任と通級指導教室担当、保護者との連携と協力の上で実施できることである。特にDAISY教科書を通常の授業の中で使用する際には、これまで使用したことがない学級担任がほとんどであることから、どの場面で使用するのか、どのように提示するのかなど、学級担任の協力と連携が必要であると考えた。

本研究では、それぞれの対象児に即して、通級指導教室と連携した通常学級でのDAISYの指導についても検討するものとした。なお、対象となった子どもたちの保護者には研究についての承諾をいただいている。

3. 結果

3.1. 通級指導教室での読み書き指導

K市通級指導教室においてDAISY教科書やDAISY図書の活用を試みた児童のうち、A児（2年生から6年生まで指導・現在中学生）B児（2年生から指導・現在5年生）C児（2年生から指導・現在3年生）3名の通級指導教室での読み書き指導の結果とDAISY教科書利用の結果の概要を報告する。

3.1.1. A児への読み書き指導の結果

A児は、ひらがな文字と音を一致させるためにひらがな文字を語頭にもつ単語とつなげ、文字に児童の知っている単語と意味でつなげることから始め、2音の単語、3音の単語と少しずつひらがな単語が読めるように指導した。よく知っている単語を使い、文字の並びをみてその意味をとらえることができるようにした。またランダムに並んだ文字列から知っている単語を抽出する練習をすることで、知っている単語を文字の並びとしてとらえることができるようになった。

しかし、これらの指導はA児にとっては困難な課題に取り組むことであるため、調子が悪いと頭痛がしたり、途中で取り組みなくなってしまったりすることもあった。また習得のペースもゆっくりであるため、本児が達成感を感じながら文字を習得することが難しかった。ひらがな文字習得のための指導を続けながら、A児が漢字に興味を持ちだしたため、ひらがな指導と合わせて漢字も指導も行ったところ、学年が上がるにつれ、漢字交じりの短文の意味をとらえることができるようになった。漢字の意味が分かるようになると、ひらがな文字を読むより漢字混じりの文の方が意味をとらえやすかった。

指導を続けた結果、A児が自分で文章が読めるようになったと感じ始めたのは、4年生の終わり頃である。しかし短い文は、読めるが学年相応の教科書を読むことは非常に困難であった。A児にとって文字を読む、文章を読む、文字を書くということはとても労力を要することである。

3.1.2. B児への読み書き指導の結果

拗音や拗促音、拗長音の読み書きの習得に弱さがみられたため、ひらがな単語の読み、拗音の指導から指導を始めた。拗音と拗長音等の特殊音節の指導、様々なひらがな単語の読み書き、ひらがな単語の抽出、単語区切りなどひらがな指導を行った。その後、1年生の漢字の読みの指導も始めた。1年生の漢字は、意味と形が繋がっているものが多く、興味を持って取り組むことができた。漢字を意味のカテゴリーに分けて提示すると覚えやすく、絵と合わせて漢字文字を提示することで漢字の意味と文字の形をつなげて覚えることができ思い出しもしやすい。思い出す時に左右の入れ替わりもあるので、偏と旁や冠などを意識して覚えるように工夫した。3年生頃には、学年相応の漢字も少しずつ覚えることができるようになり、在籍学級でも文字への自信を回復することができた。ひらがなばかりの文を読むより漢字交じりの文章の方が読みやすいが、教科書にでてくる漢字の読み替えに対応して読むことは難しく、さらに文章の量が多くなると内容を理解するまで読むには時間がかかる上、何度も読み返すという労力も必要であるため、途中であきらめてしまうことが多い。

3.1.3. C児の読み書き指導の結果

指導を始めてから少しずつ促音や特殊音節の読みができるようになったが、ひらがな書字の際の思い出しに時間がかかった。C児は、自分の考えや思いを書きたいという気持ちが強く、在籍学級でもひらがな表を片手に意欲的に取り組んでいた。単語の抽出や単語区切り、簡単な文章の読みの指導を繰り返した。ひらがな特殊音節の習得のあと1年生の漢字を意味のカテゴ

リーに分けて指導していくと、学年相応の漢字も少しずつ覚え、在籍学級での漢字テストに合わせて3個ずつ覚えることで、達成感を持てるようになった。しかし、学年相応の教科書を音読することは難しく、自分で読んで内容を理解することも難しく時間がかかった。

読み書きに困難を持つ児童への読み書きの指導は、通常学級で行われている文字指導の方法では習得ができず、1年生の文字習得の時期に習得することが難しい。早期に児童一人ひとりのアセスメントをし、児童の長所を使って指導の方法を工夫する必要がある。これらの指導方法は、これまで通級指導教室等で蓄積されてきたLD児へのひらがな指導や漢字指導の方法やLD児への読み書き指導等の先行研究を参考に行った。また、平群東ことばの教室担当の村井敏宏・中尾和人著のワークシート「読み書きが苦手な子どもへの基礎トレーニングワーク」「読み書きが苦手な子どもへのつまづき支援ワーク」「読み書きが苦手な子どもへの漢字支援ワーク」、「MIM-PMめがせ読み名人」のワークシート等を中心に使用した。

A児、B児、C児それぞれに通級指導教室でのひらがな指導や漢字指導の結果、一定の成果を得ることができた。しかし、学年相応の教科書の内容を理解していくことは、難しい。文字指導だけでは在籍学級での学習を理解して進めていくことは難しく、同じ学年の児童との学力の差が大きくなり、児童自身が学習すること自体あきらめてしまうことになりかねない。通級指導教室での読み書きの向上を目指した指導は、重ねて継続していくことが必要であるが、それと同時に在籍学級担任と連携しながら、在籍学級での学習内容を理解させていくための支援や家庭学習に対する支援を合わせて行うことが不可欠であると考えられる。

3.2. DAISYの活用

3.2.1. A児の場合

A児は、4年生からDAISY教科書(国語)を使い始め、6年生まで国語、理科を中心にDAISY教科書の活用を行った。また、A児は、自分で教科書に書いてある文の読みにとっても時間がかかるため、授業でのA児の負担が多かったため、在籍学級担任の協力を得て、在籍学級の授業でもDAISY教科書の活用を試みた。

A児の在籍学級にDAISY教科書を導入するに際して、これまでDAISYというものを見たこともない児童達の学級の授業でDAISY教科書を使用するにあたって、児童達が自然にDAISYを受け入れてくれるような工夫が必要と考えた。A児に必要なものであるが、学級での学習時に使うものであるため、みんなの学習

にも必要なものという意識が必要である。在籍学級の担任と懇談を重ね、まず朝の読書でDAISY図書を使うことにした。教室の一角にDAISYコーナーを設け、休み時間等に自由に再生できるようにすることで、誰もが使えるものであることを意識づけた。

4年生の国語「ごんぎつね」の授業では、単元に入る時の通読で、DAISY教科書を黒板のスクリーンに映し、学級の児童全員が読めるようにし、紙の教科書で読むかDAISY教科書を見て読むかを児童が選べるようにした。A児のほかにも読みに苦手さを持つ児童はいる。そういう児童達はDAISYの方を選んで読むことが多かった。これまで国語の学習時に音読や発表をほとんどしなかったA児や読みに苦手さを持つ児童が発表をすることもあり、DAISY教科書を在籍学級で使用する効果を学級担任や児童が実感することができた。この取り組みの中で従来の紙の教科書の方がいいか、DAISY教科書の方がわかりやすいのかを児童自身が選んで授業を受けていた。児童自身が自分にあった学習スタイルを選ぶことで、主体的な学びに繋がるのではないかと考える。

内容読解の授業に入ると、文章を繰り返して読み、その中から内容理解に即した文章や単語を見つけることが必要となるため、A児の机上にパソコンを置き、自分でDAISYを操作できるようにした。周りの児童は、A児が在籍学級にパソコンを持ち込んで学習を進めることへの抵抗感はあまりなく、自然に持ち込むことができた。「ごんぎつね」の単元の終わりの音読大会で、一番長い段落を選び、紙の教科書で文字を追いつながりながら音読することができた。これまでのA児は、音読はできなかつたり、ほんの一文を覚えたりしていたのである。この時のうれしそうなA児の様子を学級担任から写真で報告を受けた。DAISY教科書を使って学習することで内容理解までの時間と労力を軽減することができ、余裕を持って学習に取り組めたため、学習意欲を引き出したのではないだろうか。

DAISY教科書は、好きなときに何度も繰り返し聞くことができるため、家庭での音読練習を自分ですることができたのである。

また、「ごんぎつね」の単元末テストでは、テストをDAISY化しパソコンでテストの問題文を音声再生する方法を試みた。これまでテストの時には、担任の先生がリーディングサポートしてきたが、パソコンで問題文を再生して読みあげることで、「初めて一人でできた」と喜びを表していた。問題文は、パソコンで音声再生し、その読み上げを聞いて回答は、紙のテストに書いていた。パソコンを操作し何度も再生しながら答えをパソコンの中の問題文から見つけ、紙の解答用紙と照らし合わせて記入していた。A児のテストのDAISY化にあたっては、DAISY教科書作成ボランティア団体の方々に協力していただいた。この単元だけ

でなく長い文章を理解する単元では、学級全体で DAISY 教科書を使い、A 児は家庭学習でも使うようにした。また、理科の授業でも実験のまとめや教科書を使って説明するときに DAISY 教科書を使うことで理解が助けられた。単元末テストの結果は、「ごんぎつね」(読解)では、クラス平均95点、A 児90点であった。

理科の単元の学習内容を確認するために DAISY 教科書を使用しそれまでの学習ポイントや実験結果のまとめを行った。理科「ヒトの体とつくりと運動」では、クラス平均87点、A 児70点、「水のすがた」クラス平均89点、A 児60点であった。理科の教科書は、絵や図も多く、視覚的に優位な力を持っている A 児にとっては理解しやすい教科書であると考えていた。しかし、学年が上がると今まで使ったことがないような新しい言葉を学習する。絵や図をみて理解できても理科用語と繋げることが難しかったが、DAISY 教科書を使って音声再生と絵や図をシンクロさせて読むことで理科用語の理解が進みやすかった。

この取り組み後に学級全体に行った DAISY 教科書に関するアンケートでは、8割の児童が「DAISY 教科書があるとわかりやすかった」と回答していた。読んでいる所の色が変わるので、どこを読んでいるかがよく分かるというものであった。A 児も自分が学習をしていくためには、必要だと実感していた。

3.2.2. B児の場合

B 児は、3年生より DAISY 教科書(国語)を家庭学習、主に音読の宿題で使用した。また、B 児の希望で5年生から社会科での使用も始めた。

通級指導教室では、在籍学級での指導に入る前に DAISY 教科書を読んで、大まかな内容を理解し、読みにくい漢字の読み方を確認した。B 児は、常に DAISY 教科書を使わなくても、DAISY 教科書で大まかな内容さえ理解できれば、学習しているところや必要な箇所を従来の教科書で探することができる。しかし、最初から自分で教科書を読みこなすことは難しい。大まかな内容をつかんだ上で教科書を読むことで内容が理解しやすくなるのである。DAISY 教科書を使用することで初読の文を読む時の負担が減り、学習への抵抗を軽減することができた。在籍学級での学習にも積極的に参加できるようになり、通級指導開始時にみられた在籍学級での行動上の問題もなくなった。単元末テストでは、20点から50点位であったが、熟語等にふりがなを付けてもらえば自分で問題文を読んで回答でき、良いときには90点、悪いときでも60点がとれるようになった。

また、B 児は、4年生の終わり頃から本を読もうとするようになった。物語の本を読みたいと自分から『ナルニア物語 ライオンと魔女』を選び、朝の読書の時

間に少しずつ読み、最後まで読み切ったとうれしそうに話してくれた。文字を読むことへの抵抗感が減り、自分でも読んでみようと思いがでてきたのではないだろうか。また、映画であらすじを知っているものなら読むことができると考えたのである。先に大まかな内容を分かっていると文章を読むことができることを児童自身が身につけたのである。

5年生からは、社会科の DAISY 教科書を利用して家庭学習のやり方を通級指導教室で始めている。社会のテストの点数を上げたい、社会が分かりたいという本児の願いからである。学習したいものにアプローチするための自分に合った学習スタイルを身につけることは、今後学習をしていく上で必要なことである。自分の iPad で DAISY 教科書を再生し、自分で操作しながら学習を進めることができるようになっていく。

3.2.3. C児の場合

2年生より通級指導教室においてひらがなの読み書き指導と平行して DAISY 教科書の活用を行った。家庭学習での音読の宿題をするのにかなりの時間を要し、なかなか取り組めていなかった為、C 児の音読の宿題の代わりに DAISY 教科書を再生し文字を追いながら音声を聞くようにした。C 児は読みに苦手さを持つと同時に不注意もあり、読み間違えも多いため、正しく音読することが苦手であった。DAISY は、音声再生される部分が反転して色が変わるため、どこの文字を読んでいるかを見つけやすい。C 児のように不注意がある児童にとって注意すべき箇所が分かりやすいため、読み飛ばしや読み間違いが少なくなる。C 児は、話し言葉は豊かで知っている単語も少なくない児童である。学習前に DAISY 教科書を聞いておくと、大まかな内容を把握することができるため、在籍学級での内容理解に繋がりがやすく教室での学習に積極的に参加できるようになった。物語文のように読む量が多くなる単元で、2年生の終わりから在籍学級での使用を始めた。C 児は、通級指導開始と同時に DAISY 教科書の利用を始めたことで、漢字の苦手さはあるものの、2年生の国語の教科書文の内容を大まかに理解することができ、学級での学習に対して抵抗感が少ない。DAISY 教科書を使うとよく分かったと実感している。家庭で DAISY を使えないときは、自分から通級指導教室に来たときに「DAISY、読みたい」と言う。通級指導教室では、iPad で再生し、自分で操作している。教科書3ページ分くらいを一度に再生し、内容についての質問をするとほぼ正解することができる。

4. 成果と課題

読み書きに困難を持つ児童3名に通級での指導と合わせて DAISY 教科書の活用を試みたところ、活用方

法は異なるが3名ともに効果を確認することができた。在籍学級での授業での挙手が増え、積極的に参加するようになってきたり、学習意欲の高まりを行動から観察したりすることができた。また、行動観察だけでなくDAISY教科書を使用した単元末テストの点数が上がったり、DAISY教科書を使わない単元や他の教科の点数も少しずつ伸びたりしている。

奥村ら(2011)は、発達性読み書き障害への障害特性に応じた読み支援の開発をおこなっているが、文を読む際のハイライト表示と音声同時提示が、小学校2～3年生の発達性読み書き障害児と定型発達児において文意理解および記憶の向上に効果があると指摘している²⁾。発達性読み書き障害児・者において文字とハイライトが同時に提示されるパソコンモニターを用いた電子図書が文章の読みの際の文章理解向上に効果があると確認できたと述べている。

本報告の事例での効果及び先行研究から読み書きに困難を持つ児童への読み支援の一つの方法としてDAISY図書やDAISY教科書を使用することで、教科書に書いてある文章をより理解することができることがわかった。しかも、なるべく早くからDAISY図書やDAISY教科書を使うことで文字や学習に対する抵抗感を軽減でき、新しい単語の読みや意味の習得ができやすくなると考える。

本事例の3名のうち2名の児童の心理検査結果からみると、一人が7歳時のWISC-Ⅲ言語性IQ80、9歳時の言語性IQ79、11歳時の言語性IQ87、もう一人が7歳時のWISC-Ⅲ言語性IQ79、10歳時のWISC-Ⅳ言語性IQ103と、どちらの児童も言語領域の伸びがみられた。後の一名については、通級後2年経過していないため比較する検査が実施できていない。2名の検査結果からも通級指導と合わせて通常学級での学習支援にDAISY教科書を使うことは、読み書きに困難を示す児童にとって有効な支援の方法であると思われる。

今後、さらに多くの事例で確認していくことが必要である。DAISYを利用することで実際に単語力が向上するかどうかを実証することはできていないが、本の読み聞かせが言葉の力を育て伸ばすことは、これまでの研究等で明らかになっている。読みに困難を持つ児童が教科書や図書にDAISYを使ってアクセスし、内容を理解していくことは読み聞かせと同じ効果があるのではないかと考えている。

在籍学級でのDAISY教科書の使用に関しては、「教科書バリアフリー法」で障害のある児童に対して供給できるものとされているため、読みに困難を持つ児童が在籍する学級では使用できるが、在籍しない学級で使用することはできない。申請等が必要であるため、同じ学年で統一して使用することができない。読み書きに困難を持つ児童が在籍する学級だけのもの

という特別感が残ってしまう。読み書きに困難を持つ児童だけでなく、定型発達児童の中にも必要としている児童がいることは、アンケート結果からも明らかである。読み書きに困難を持つかいないかの枠を超えて使用できるようになるとさらに使用しやすいものになるのではないだろうか。現在使われ始めているデジタル教科書(担任教師が授業で使う教材として作成されている)がDAISY教科書のようにマルチな機能を持った上で、指導用の教師版だけでなくどの児童も使用することができる児童版が作られ、自宅へも持ち帰ることができるものになると、読みに困難を持つ児童も定型発達児も使えるものになるのではないかと考える。法の規制の下にある障害を持つ児童のためのDAISY教科書と誰もが使えるデジタル教科書が一つになることが、インクルーシブな授業への一歩になり得るのではないかと考える。

文部科学省は、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムの構築のための特別支援教育の推進(報告)」の中で、次のように指摘している³⁾。

「障害のある子どもと障害のない子どもが、できるだけ同じ場で共に学ぶことを目指すべきである。その場合には、それぞれの子どもが授業内容が分かり学習内容に参加している実感・達成感を持ちながら充実した時間を過ごしつつ、生きる力を身につけていけるかどうか、これが最も本質的な視点であり、そのための環境整備が必要である」

また、「障害のある子どもが十分に教育を受けられる為の合理的配慮及び基礎となる環境整備」として一人ひとりの教育的ニーズに合わせた「合理的配慮」の提供についても指摘している。DAISY教科書の適切な活用が、上記の「合理的配慮」に繋がるものであり、それらの配慮が個別の指導計画において引き継がれ学年が上がり、校種や担任が代わっても同じように利用できる体制づくりが望まれる。

また、現在の学校のICT機器の導入状況は少なく、多くの学級でパソコンを持ちこむことや個人が使用することに課題がある。本事例の3名に関しては、家庭や日本リハビリテーション協会からの貸与で対応することができた。今後多くの学級や児童が使用することになると機器の準備が不可欠となる。現在、DAISY図書やDAISY教科書は、パソコンだけでなくiPadでも再生できるようになっているが、使う児童の個人負担になったり、担当教師の私物を使ったりすることになるため、導入に消極的になる場合がある。DAISYだけでなく、ICT機器を使った支援の方法が、多く開発されつつある中で、どの児童にもわかりやすい授業の提供という点からも学校への機器の導入が望まれる。

引用文献

- 1) 文部省・学習障害及びこれに類似する学習上の困難を有する児童生徒の指導方法に関する調査研究協力者会議 (1999) 学習障害児に対する指導について (報告).
- 2) 奥村智人 (2011) 発達性読み書き障害への障害特性に応じた読み支援法の開発 (博報堂2010年度助成研究). <http://www.hakuhodo.co.jp/foundation/subsidy/pdf/5th01.pdf>. 2015年1月閲覧
- 3) 文部科学省・特別支援教育の在り方に関する特別委員会 (2011) 共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進 (報告).

参考文献

- 上野一彦・海津亜希子・服部美佳子 (2005) 軽度発達障害の心理アセスメント WISC-IIIの上手な利用と事例. 日本文化科学社
- 海津亜希子 (2008) 通常学級における学習につまずきのある子どもへの多層指導モデル (MIM) 開発に関する研究
- 海津亜希子 多層指導モデルMIM 読みのアセスメ

ントと指導パッケージ.

- 稲垣真澄 (2010) 特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン わかりやすい診断手順と支援の実際、診断と治療社
- 宇野彰・春原則子・金子昌人・Taeko N.Wydell (2006) 小学生の読み書きスクリーニング検査 発達性読み書き障害 (発達性 deslexia) 検出のために インテルナ出版
- 小池敏英・雲井未歆・渡辺健治・上野一彦 (2005) LD児の漢字学習とその支援: 一人ひとりの力をのばす書字教材, 北大路書房
- 京都府総合教育センター (2011) 読める! 書ける! すべての子どもが楽に読み書きを学ぶために
- 藤田和弘・青山真二・熊谷恵子 (2006) 長所活用型指導で子どもが変わる, 図書文化
- 山田充・苫廣みさき・今村佐智子 (2001) 子どもの学ぶ力を引き出す個別の指導と教材活用 堺市三校の通級指導教室からの実践から, かもがわ出版
- 村井敏広・中尾和人 (2010) 読み書きがにがてな子どもへの〈基礎〉トレーニングワーク, 明治図書
- 村井敏広 (2010) 読み書きが苦手な子どもへの〈つまずき〉支援ワーク, 明治図書

